

## アトモスフィア

## 豊かで寛容な精神

西野 武士\*

当時はそれほど稀ではなかったのですが、中学時代から新聞配達をして学資を稼ぎ、やっとの思いで大学に入学し、奨学金とアルバイトで自活して大学を卒業した後、医師不足の折りにもかかわらず、医師という安定した職業につかず、研究者という生活の不安定な放蕩の道を行ってきた者から見ても、現在の多くの研究者のおかれている状況は、私のつらかった中学・高校時代より悲惨というほかありません。私の若いころ研究室は貧乏であり、それでも、私の尊敬する先生達は理想的精神を語っておられました。「勉学の競争相手は学問そのものであり、ヒト（他人）ではない」、「少なくとも生物の分野で、重要でない対象などない、その重要性を認識されていないだけだ。その重要性を認識するのが研究の任務だ」。これらの言葉が、自分の心を動かし、損得を省みず、思いのまま放蕩の道を行きました。米国のポストドク時代も、私のボスは「私が研究しているのは、“Just for fun”」と言い、論文を幾つ書けともいわず、いつも興奮して討論していました。さすが、50年代のケンブリッジ大学の生化学の黄金時代の出身者と、その「育ちのよさ」にえらく感心していたものでありました。そのようなアトモスフィアに喚起され、土日はもちろん通常の曜日は少なからず夜を徹して実験の放蕩生活に明け暮れました。

しかし、科学を経済発展の手段とする現在の状況は、科学を楽しませる余裕を与えてくれないようです。豊かな国の所産として豊かな精神と豊かな文化、その結果として高いレベルの科学というより、貧者の国の経済を發展させるための限られた目的の科学のようです。もちろん科学技術は経済發展には欠かせないという点で重要であることは当然ですが、その施策はあまりにも短絡的で、結果的に豊かで自由な精神を失い、極めて俗物的な精神と結果を産み出しかねない状況です。「他の競争相手と競争しないと研究費はありません。」では、本来の精神を曲げてしまいます。もちろん、優れた研究を見出し評価し、その研究を絶えさせないような研究費を「競争的研究費」として提供するのには意味があり、刺激になるよい施策と思います。しかし、研究というのは、サンガーやベルツやケンドリューの例を見るまでもなく、長年の経過を見ないと研究は評価できないというのが実際で、彼ら本人にも自信がないものでした。実験研究はトコトンやらないと結果は分からないのであって、計画者といえども先の約束は見えないのが本来でしょう。それを計画において「不採択の評価は出来る」と考えるとしたら横暴な自信家（病人です）と考えざるをえません。すべて競争的研究費とすることは、評価する側も評価できない計画書（全てではないが）を読むだけ時間の無駄なので、殆どの研究したい人に、本人の給与の2~3割程度を必要経費と考え、無駄を承知で提供するのがよいと思うのです。その投資ができる余裕があることが目指すはずの豊かな国の証しであり、きっと良い芽が少しは出てくると期待できるでしょう。その上に立って、優れた研究を見出し評価し、その研究を絶えさせないような必要の研究費の額を、十分時間をかけて査定し「競争的資金」として補助援助することは有意義でしょう。咲いている花に水をかけすぎると花は枯れます。少なくとも研究費ゼロの研究者は最低限にすべきです。第一、研究したい人に給与を払った上に、2~3割程度のお金を惜しんで遊ばせるほうがより無駄ではないですか？ 研究しない人は教育に専念などと言っても、そのような人の講義など、私の経験では退屈で時間の無駄でした。

最近大学などでも研究評価とそれに伴う任期制も取り入れたりしていますが、あまりに低次元と思うことが多く、時間の浪費にうんざりするばかりです。「研究者は論文を生産する機械」と思う人もいるようです。論文1つ発表するにしても、間違いのないことを確かめるために、裏の裏をとる実験を重ね、1つ1つに吟味を重ねて発表するのが発表者の当然の責任です。そのような吟味を重ねる過程を通して科学的思考と態度を養成するのであり、安直ではないのですから、それは時間が「かかる」のではなく、「かける」でしょう。一束に数えられないのです。数値目標のような低次元の研究評価は数値あわせや捏造など、あわれな結果を生むばかりであり、墮落の精神が科学の魅力から遠ざける結果となっていると危惧するばかりです。数値目標に基づく任期制という一見効率的と見える制度は、そのような副作用を生むばかりか、それだけでなく不安に生活する研究者に、さらに不安の追い討ちかけてどうして新しい芽が育つでしょうか。研究者の生涯給与はそれだけでなくともともと低いのですから。

\*日本医科大学大学院教授